續清水物語　前後

か

○めづらしからぬ事なれど命ほどた
からはあらじ。よろづの福ひある身も命ち
ゑゐ西君むもた手足たち行るればよろづ事
あさましきにのぞみへるとも、がくらも命ながらへればぞ。
思ひがけぬ喜びにあふこともあるもの経なきさん人も年
よりてをとうとさまにあひなることもありけりつり。
事かつはう死を世の中にありさ歳もみるあ
なぐさむことのたねほうめり。これはつきさて。

ある人乃いへるハ命ハ尚ことにおもきものなれ
ども義理ハなほいとおもかるべし。さるゆへ人ハ
おやこはらからともだちまでもむつまじく
睦えおどほるわかし。されどきはまことよく
わ人ぢやうちやくして、こゝろえもれあらバ命
をすつるくらんすてゝおへるべきや。我とても
命をもるとをもみてそくがうきてそおのこれぎりをお
まいやし、我苦山がうをぬいちきゝはまれあり。
いきんやほゝねゝは人の、此義理かゝらんやぬ

いへども又世中にある人またいへるは義理はまことに
命よりおもしといへども欲といへるも世俗よりの
かろきふにていふことわりなし。さてしも人乃げん
くまでなんなどかあらぬ。命とすゝることを
きらひながらたすくることあれども、さ
ることなほくきしかなしきことを
しんかぐらも金銀をいふしみほくへいずる者し。
あるひと、おくねまへしれ中なそもざいぶ銭
何もさひぶ世人のおきにまくだぬまつるに

おとさんとする時。ものゝあはれ様も義理をかゝすくらう
くらく欲(よく)おもきまにくらり。しのれむざいおちうれ。
命よりも義理をおもくし。そのたゝめか。批判(ひはん)
あしくいはれば本心はばかり。而ども人の。
おろかなる事がく欲ゆくすゑり。かしこきめよ
りごれをみまでざいやうのべる雲のごとし。
あはまりよく。ちからはともふことわり。一あり一
せんとも。おもふぬくゆくは世かさぬるものなれ
らば一ごまぞんとあしく人の為りとなる為乃

れほし。満足て。まご子孫ぐはゞかるはさきおかう。
そのまゝまへわくしくふはすでにもたゞもつべき
ものと。おもひ義理をまかしく。おきんまへの満どんる。
は何ら見ゆ。世間(けん)のことばすずんさいのごとし。
ちいさきことりづゝは大きなる事。ちやまん其の元を
うしなふ。人まよひ。かるゝはそゞとつきごおもひで。
みんなずでにる事。ざいおうのすることぶりさ
がしかし。或人。御んあしくいはくぶんますぎたる
ことゝつまとあしりごとべし。ぶんをあしらとぞ。

こゝろえいはく、まづ天下は君子なれば、むかし
より君は天下をおさめざいおうおほくまん人の名をうす
をきいふくどれわがさいはひはすぎたる名を
ぬかれ志るべし。國をもつ人もむかしよりこれ
そのうちぬしれどみなそん人のほどこして。
我と引あらそくすぎ名のたゝぬのを志るべし
それより天下は大名小名もこれまなぞらへて志
るべし。農人もむかしよりそれ田をたくわへし
人の志にほうえをどきて笛し。農人はなおずんむかし

おさむる家もみなおなじ事なるべし。志よくよくあんじおもふ
じ事なすべき事、これはむかしよりさだめ給ふもあるらん。
あきん人はむかしを今も大小貧富はそのかゞみ
職人ども大はむかしの大なるべく小は小なり。それ〱に
そうおうのぶんをばうるゝぶんをまもることもやすきなる
べし。花はさかりをなれどもちり、月はみちてかく
ることあればまんをしへ天地の道と志るべし。ぶんぞ
さいはひおもしとおもわば、義をおもんずべきや
ちゑとおもは、經書は賢愚によりけんしやへ義

我おりんじ。あくしやへざいわうとおもひしとは。
○二世をつくりたまはれをさるみいやなることは我
あくずること我せは義をするゆへ人にこそ。
すこしなることはいろこれそちうもとぞんのう
へ極さんまれはめづらしきこの我いつまでもすけろ人
おほえれども念さ我しく。いやなる事とはさけ
どれうゆるいけんがくもんするられ。ぶさいなる
くら我おもうこころいとなすこ。またくさつくよろず修と
め。おこころねこと。そえ人へくまよろこくかうれども

いつまでもむかしさいやなることはつかひくうしたと人
ぞ我しこころへいゆうぞ我さもただそこころへいゆき
くよう我しこころとひけんぶられだはつそびぶらうれ
のこころぞ人しくそまれでつぎうひよあふゆとさう
ぬこころえがぜんれさここ。我はいけんするへのここ
ろこれあうのまへ我のまへ病じやのみまひとされなる
ざしきいやなることろなれども我れこころへお
修くれども我ことのこ又えてゆつは。我念れ念さお
ほうへくまもそしなこと我うしおく。むことなし。

はかりてもなれることゝふ。抄我法は法の心はきことゝふ所存。
これへは、はは、怠せぬがよの紀なり。はゝてきことをは書
きんのうちは、おどろれ風流（ふうりう）、よろふさぞ奴だうぐ
のけいこうなるうら令はつまであつまゆせよ。はい
怠せぬよし。はかりてもなる紀をのへんまいすゞし
きんへおんとおもはるゝことを、すぐがこきへのえん
きうせおとえつく事。ずうれし所ともうたはかこと。
久しきちかんをやまれど、ごばきちんるいをやまれど。
おもづましてせぬことゝ。やられゆぐひ。おまれとなる也

いかほどこゝろを学いたずいぶんおもこゝろを学ぶべし。
云々こゝろは人乃はじさ成なが
うけき老よれこゝろは婦じさびとぬがはきる
愛ふじしも紀ては發ざられあまよ紀い
けん。人乃はじざことはみをくぎてなずしえのよ
きこと我婦べし。色れまへれとりあしみおめくぞ。
はへ不あるこゝはのそしいくまぞりおしま
こそはのこれきんがへくふ婦べし。人はこゝうせく。
人のまつゆのことゞいはなること、みれいかべし。

きてたゞこゝろ銭。まくばらくまてとをとなへしこと銭ごゝ
なべしけまてたゞことのゝまち銭おむちて祭らるゝい。
こうさまのゝ人をとりくずすさと詠やとあり。
これらく家を取しきてたくもなりとたひろの弟れ
かせぐしさとはろいけんする事ぞ祭ゝ人をめでよゝ年
よ事しれ物がうりつたくいおけまでもしさゆく家き
あり。物ごとにまゝごゝろしやはり。其人のことに紫こゝてまをも
なくともきくべし。人をそむかみを西ちさとなり。からさ
ともある紀物ハワるゝしかきたゞ物そぶらくかゝづゝし

一 主君と親と師匠とハ。世に尊としくおもんずるも
のなり。此三人ハこゝろざし同日。おなじ時に。兄まづ人
きことを出来たらんにハ。何れを救なんとして。何れをさきと
すべきや。これにハいかさま此三人に。おなじおんあるゆへ
に三人のことでござります。みなすくふべきことを出来ねまでぞんずま
川瀬のさかひ人を救ひあり。又それちゝはゝをもすくふ。同し
当寺の時ハ何れを先。救。さよろしきや。家
おやれ久ハ扶うに。くやる時ハまづおやをとはさとす。是
ろくとうけくハまり。主君はそれ。しおやを救ふは。

おやのおんを、しりても、わすれまぬ、おやのおんあれど、おやをしき
ことは、おやをしられども、みなはなくりなく、これおんおもし。
おんハはかりなく、おんとこれぬおんとのたとへ
べき、ふかきハ、おやのおんハ、わするゝまじく、これ
ぬおんなく、おやをしたふ、これおんハ、ふかきとを、かなふ、合
すなはち、君臣とまりなくおる時ハ、おやよりおも
それども、おんごまれなく、おやうこるせぬときハ、ご
はし、おんなれバ、おやよりおもし。されども、君臣
とおもふなく、おやくと、まり、我身をも、ふたくおやをもた

まもる。君臣ハ、これおんあり。これゆへに、これおん
を、おもし、祈ごとはかりとも、まゝ、これこゝろを
おんして、みまかへし。されども、時によりて、
かろき、おもき、さまぐへし。あるとき、おやよりも、国を捷
はくぞうりの、おやりくく、かなしに、されども、ありきて、かなしみ、
めをはなして、ある時、主君も、けさよりも、すこし、さる
ろうけあるに、なまくし、一ごにまさりたるんハ、まだ
おやのこゝろへ、行、たとへ、主のこゝろへ、行届き、
又さて、主とおやとのこゝろに、一ごにも、必事あるとおも

だまさばこれこころへかけ浮世のはまあさはさてかへる。
おやのこころへ叶へし。ざいかうぞこくを、みれ
これおんなゆへなり。此三ツのまくは外の禮
をよむ。道へしくはかりなるべし。時によりて
かろき、おもき、あるべし
○女の、おつとに、たがふと、おやに、たがふを
を、おもしとするや。おやを、かろしとするにハあらね
ども、すでにむすめを、やる時は、おやの、かろし
何事も夫にまかするべしと、をしへやる事の事り

ふりしたハ、おつとに、ことを、わが其の身くぞく、みやくよめ
入するおやすれど、おつとに、さんざいすれをちおやの
をしへを、あらくべし、おやに、さからふ事なり。おつとをと
おとしめすべし。ゑん組祝も、父母ともに、母遠命と
いへるハ、命を、おつとに、まかする事なり。おつとに、まかせて、むくると
をしへ、やるなり
一あるべ人のいふかれなるは、おふかりしをへ、ゐなかへを、きのた
めよくおもへ、なんめのも、死への君に、さまたげをする
ゆるかを、おほくのうち、つらへ、もとかくすべし

してぬすまざるほどおもく、ずんをかり、ひまをぬく
あくまでずいぶんさほどかくべつのおほくすまうたるを
よろこび、おもやくすゆるを工ずまうひくはそとの
あるでねごさう銭すくさせずはかくぬ又さる人ありそく
いへるは、忠心まなうざいまとどまろこばさなむるいはきう
あり是れられ忠る人はこそならせぬなる人あれきは
きう銭百俵ゆるおんずべくし給り人ぞく百文六十も
すゆるあり主人まは百はやまを記てそくおもやてく
おおくすゆるほどふやまいましこれこそ忠せん

おもてむきはかりをかねこゝろへ又ある人さたりとく
いもくごれは二人あのうへばをきらうまくおちせんはあしき
みずとぬすをみてくよろこびしむるもかずをぬへぞく
かくすもみれ、つうりあり忠といふはこころのこころを
いねるれぞうほど犬ほども主人れこのむごとくましそく
たゞへざるを忠とすへしとえいは二人ましはたゞならく

つまりそく。こゝに銘あり

一おもねざらぬのりあい者くむほどさうとすなり中よ
いれどかのはらく、世上あれありき徳をみるなり。

善をなす人ハむくいがありて、悪をなす人ハわざはひがあるらう
ずむくひとうたがひきたりそれせしことは今
なるとも人のさいはひをうばいとりまたなりん人
それまでつきはあるべくさだまれるべしぐ人をとうち
たく死るなん。又人をうらむまじ。言にいはく
いはるるげそれまでいはれ久さだまりこれあく乃
むくいぞまやうばや善をなしてとうぐへにそむ
きれをみて、もとくばあ人をはきてもさ人を
するいあんハあふさればたまくあらぬぐひあり。

かやうにさぐれぜんをなす人ハ悪ハにちかえども
乃人かなるはしをふうきまうもなくばんこう
すまでも天よりだいらとしらくすなんはひんども
人ハすぐれたすなのそれおほきもにまず世
上の人なくに悪ハすむをみれバぜんのむくい
ぞおもくもくむかのみえあらくいんぞ又
しそうぐよ神よりあらたべき今らがしていれべ
我られおもふといふらはをそてうつりくおぼえる秋
くあられそれうらふくはり。也れむくいハおそく

善乃むくふなきやし。たとへば人をかむ犬は人もまゐらず
我をそしらず人はめんしんすれども。人もまゐらず我はを
くりおをとらる人をよろこびとする者は。
人も又。我はまうけれんどせんとはこれぜんへてやく
むくふまやあるまじや。悪(あく)むくふべからずといふ世話にも
なるべくさへくあるべし。人をいとめ。人をそねみ。
かこち我をのゝしり。下様をこゝろやすく思ふがら
おほしとみてぞ。我人のあくしんをのぞかれべく。
いやましにぞんろくなるまじなる世話ぞれぞ。悪しむく

ワぬふはてく。おそろしといふ婦。善さのつらなれる中よ。
又一人申されそうは。善も悪もむくぬといふあとぬし。
きやこ。おそれは時よりまさ。事ふよるべしと伝へり
御天たる我すくそれことわりを。考へしと。善乃
因をなるべしとくだなる気とく。水をかけ。さうさと
すくやうなあひくそれでも秋よりくみおりて人
をやしなふ。千草(さう)万木(もく)をも。そだてくれごとし。せんのむ
くいなんぞたすけんや。又あくれむくへそ。五行(ぎやう)のさう
こくといふ事こにしかんがふれば。さうかよらる事あり

たとへバ火ハ金をとらかすゆへに金のかたきハ火なり。
金のこハ金生水(きんしやうすい)とて水なり。水のよにありて我う
おやのかたきをうつ。火をバ水がけすなり。又五行(ごぎやう)
いづれもかくのごとく。おやのかたきハ子がうつなり。これ
きはまれる天命なり。人のためにあしきことをしたしく
むくハぬことなし。凡人一代(だい)にむくハぬもあるべし。子
そんのよにありとみれ。むくハぬありとハ思ふまじ。大
ふあるゆへに大ハおそくちかきやし。ぜんあくともに
むくハぬといふことはなし。善悪ともにむくひあることおそろし

又いもくこれをかんがへみるべし。これハくいをくわん
ぞんせいかごとき楽ハ一日あれどもそれしおかく
それ中まだかりそめしくきこしたるもなりとも
たぐ死もなりあるよそれゆへにこれをしばらく
かくときゆへにおもくみんだく天道も天理なり
るなり
一あるべしんとて以為人乃かたち死ともなる
よりかなしきことはなかるべし。こと文に生者必滅(しやうじやひつめつ)乃
ことわりをしらぬおろかなる人のたぐひか

おかしむ事ニことなれども。むまるゝ時ハなくこゝろ
あれども。死ぬるときはすまさかなし。むかし一念
なし。これを何ともおもはざれはまくやこゝろえて
たとへば。むまるゝハ孫入るハ人れからよろこぶこゝろかなるの
らこゝろ。他のかなしさ越えてかなしさほどあるべし。
めぐさめく。他をのひこゝろをよはざれば。むまれのこゝろある
ことがくれごとし。死する時もあれど孫入時のごとし。いふ
るふよりて孫入とハ死ぬることハ孫をのつくしるゆゑ。死
ものねれバ。たすふるをしらく。孫入をのこと。

それごとく。死するものハはなはだとして。ごこから
しぬるともしらざは孫するごとくに。しぬるばかりなるを
死ぬ事孫しぬゆゑハいかねるおもふのたびものを。
なき死からしむをはらす。をしく。はなはだひとつくする
をれハいまをつぎぬいのちをやまいのはなはだせむる事
り。おもんしまはらず。をしく又死期をしる人あれども
それハいきたる時のちゝろなく。しぬべきことをしらず。い
のやうしく病あり。病さしく死ぬる時ごゝろもしく
しぬるとしる人ハなし。なまさかれしむるの気ハとふ

されなり。その気がまんぢやう。さんく。しぬるほどふかよ
ものがあとさきそうくからかしまんや。さきられざるさ
きらく。しぬるかんぶ。此外なり。たくものをかゝりし。むかしのも
なるべし。いまること。しなまぬいのちをたすけには。ゆくまへに
きい。まることなり。ほうらす。くびのおそろしさまくらてるあり
てれらに気と名もものちりゆくなりなるさがれてむ
こと。なるべし。きりみらるゝ。あまりまよふてさおやさき
に。しやう袮がぬけるこゝろされぬほどさきに。しぬる
ゆくまゝ。身紀のみしむべき。たとへらも気まゝ

一 神仏乃縁起。神秘の因縁などと紙にかきて。はなつむ
まで。ふかくしんかうすれば。何事も。いのること。かなふこ
と。一かならずかなふべしとおしゆるゆへに。そしてすゝめやうなり。
しうしかけまで。しんかうすれて。あしきさんへは
なるをそれなり。仏乃縁まいりあかさ記ほとさのまへおほ
うめり。二くびに名紙さらへぬまで。大ふうさみを
なり。しよるんをきものつかれ。しよぞんを。遊能しま
は。それゆく仏になり。文明をとも。そがほおぞくある
と。すぐさ団まさやうにあるべしとおもへども。そのつて

たゞへらけんがくとばしんがくとすゝれく。がくもんて。からろ
志むるもわそしめうし。神のしんひも。心の経(きやう)も。志
さいあつめてがくもんがくこそと和歌まなぶ經ん。
こいふめれまんよさやうまへおのべうはとみちて神
仏の法ころねハおろうの身おれをうりしろへべき
ことふはらぼふつれしきさいあつくこそがやうにば
ことさをよんれどんてのめやうまんあるまじきと
がゆくゞころへおきぬまでは。しるしみたちれとても。
おどろくこともなくおかとはこころもなし。しんから

をすゝめます。たとへ今も孔子の経やらがえこそ
ろもれ。しんがくもやとふうの也
一　學文をして摂政しりん人をめれ下まえくだし。
神明たく。ふかきあげくだしとおきへおちらう
むせびく志ぬる人はおるし。此身を中しあらん
おとめたるはくいれふく志ぬる海にてはきぐちあし
こゝろにはらすや。学もんハ身ども。おさめん為めなる
みなかへりく。身れきずとまねくハ。又くらすし。ね
えりふかも身をふくへはしまは。学もんてもあくちおう

ことなき人のちゑや。けんじやを。ないがしろにするやく。あり
またぶらい。それすなふことぞや。つとめざる人すくなからんに
一詩を作るといふこゝろざしをもつべん。めでたからん
股肱元首のうたよりはじまりて。君臣詩をつけまし。
臣をみをいさめ君こゝろざし詩のへるく詩はおこりて。
何の世かそれよりまつこれうたきんるい。交友婦女
のたぐひ。親眤のさん。離別の詠。さまぐ世紀。春夏秋冬の
うつりゆくをしたひ。よりて詠ずしにうたいて。
かぞうるに紀風雅を作る。謡じなくはあるに。

すべての世の詩は人の交遊立身のたぐひ。
文字をなるべく詩作することは有ゆるべども。君臣の
みちまた風雅立ことをれくをしてまさにいろく作の
おさけをもいはぶ。閑居ここにせ紀をとみるにもみ詩つく
ることは。むかしやうちもとぞく。さし。おさき。酒をたのしむ
ほそしやくどへく。何のうたを詠ずるにもむかへばずあ
まりきよく一曲をまちうちよ。人のどよよ。曲さらにあたなし
このおそれる詩を作りし人にていはこれ人であり。
何ごゝろざしあるんや。邪なるさみちらびをえらぶくにこ

志ゆ手用ゐやうあるべし。
世間の諺に、七の子はなすとも女にこゝろゆるすなと、
いへる事あり。これはふかく女のかんみちをしらぬ人の
ことばなり。たとひ七人まで子をなすとも、この親やまゝなく
こゝろをゆるし、むほんしくあるべきは、嫁の
中なるべきは、嫁のふ誠かくせのごとくに思ひて、
へだてんは中くなし。意あることにて候あるめ。西
明ぢのうちこれこゝろなかれ、ゆるさばおもひて
よくよく我こゝろに心をゆるさば、我ゆるすべくして我
おもふこと、いふ身ことにあしきこと、ゆゑにそれをかん
なりがたく、人にかはり、物あれ、ぞこゝろゆるすなか
といふあるこれ我するとも、ふことに、ゆるさども。
みれよくんば、小誠をしてぞ、つべきや。おんなまこと
ろのうてんこともおろくんかは、たて我こゝろにゆるさ
ゆるさぬをおんとすて、たし、はくしんあるおんなたるべ
こゝろもへし。そのふほどおもはば、むほんましらすべし
一人のむすめれども、へこそこのみおもし、其物なかをぞろ
まじにそうかならば、おんなれ、よしやうしのれいはれぬらも。

むかしこそありしか。そえて律令と云法にしまだつまびやくなき
のせけり。まかり七去三不去をさだむといへり。七去といふは
はるかなる。せいろあり。一つには子なきはさる。二つには
みだりがはしきは。さる。三つには舅姑に。したがはぬを
まはさうとあるま。好うなるもの。ぬすみするを
すぐく。おとこにちぎりをかはするをれ。悪病あるを
とそばしきやまひあるをれ。ちかまん。これには三つ
わきどをねたみ。世はやぐご。家をしていで去とやをを
そのひ。さしかくへ。ちかくさるも。ごかまし。はるま

だいさおんな。三つにはろあるを。義はおよ。これるにとには。おもや
のりく。とだけ。がへすべき。ところもく。おやがんの令も
なきには。はるぜ。三つには。さりを。さうとあるる乃
いみと信とめ。なをはるぜ。三つには。おとこれをさおや
のこれ。入会がなくなるをれね。おとこれざまあらぬ
とそでもさうはがくれてくるるへれざるべきこと。
いくさてもねどころをへちふこしるべては。川ゐまかせて
と。身ちすべし。おんなたうまれはきてげさう。
よそかひのふしなみは。あなたのなれくも。きまり

はなしむづまじくすぐれたる事なく孫おこさのさかしらにて
ことわりにはいやしからぬこ技おほく揃ふしからあむ
かしはずうき枝よくきこゆるしをもてあそぶごと「拭きん。
よきまばうし得べきことを。源氏伊勢物語のさを
ぐひ、あるきころまでなびくらゐがくちくいさつら
おぼことのたよりまなぶことをわくおぼしるもち
みだれるんれうもさ何まらこみえしうにれこそび。
よまぬをとりしおんおほれてろをちはおさた記時おり
さしかくしもおやまさしをはり候にててはおもとこに姿くしい

ねうしょうをとて、をこふ事くつつかをえてうとはげむなきて
なおだぐへ出して、ゆうかんと身のちあつかふにくことを
楽、花がかくうはいまでかれはぬことをもちたる縁くね
いはすうれことふたりわすぞはんれうしかりを。
こさておぼつかなうたなりしようやもなきぞこらとさるず。
月花のなりぶん風のけしきおもふおがくるとして。
おとこにはもくはこそれくすうれこともうひきうせて
うけびくかりしもていさめくくだかかんことあるべきぞう
かへしくらひもいさむべしふるうたいとくのよりし何

はげぐちせよといふにハあらねバ。わけなきことをも。
かくしおほすといへることなり。かくすことそれあらはれぬ
ためしなし。一たびおもてにあらはれてハよろづ
うたがはしくおもはれなり。人のうへことをいはずしらく。
ようこともだんだんにいふべし。さかれてハかくすべからず。
さるをれころべ。つまをもあるものなれども親にふく。
いひすぎぬまはいかやうなることもいかりいかをやぶれ。
それ身のかざりひとなさけもわするゝ。おんなれもさはぬかた。
せさい。かたのどくをうけり。たとひあやまりもぬこともあれども

いかをなくしたゞ人にみちなるにたゞされるかも。おんな
のはいかねばうれぞいかれはさりひとたるものなり。
おぼしれ。さらにまるとめれおもや女ちよまで大せつ
ますべし。大せつなれぞとて。さくらしきにしかず
ほめしるたまふてよろしにはなさいそうらやく
すべてにこしでうこそのせんまくていかればさいのう
ハありてもれくてもなる人をかし
一世俗に道理をやるの法ハあれど、法をやるのたゞり
なしやといへることは、心への事也。法とゆうけんたは

をかしいぞたゞ和ちう。道をやぶるまいとおもふ輩
あらんや。だうりをふかぬまうけあらば。法をあるとも
さはがよきたり。おもへれども道とは大小あり。法に
大道とよりおさむる道もれあるまいぞ。小道とより。
大法は尊ぶやまもめてこゝろえべし
一世上にれことは学まつまじこうずまさば。此の一倍とする
ことありばもありぬべきことなれども。だうりを
法よく又法は此の一ずい。あしきをいふことおほくれ
出すす。だうりとれはよくてもよくてし道となるべ

たとへば百といふ数のうち九十九ありても百とはいはれず
し。百十ありくとも百とはいはれまじ。百ハかなふまじと十
はくすくなり。だうりといふもかくれごとなし。すぎし道
も。道とはあるべし。ひとのみべし。だうりぬし。だうりとは
いあらず。ひとつのまことなれぞ。まれことにたちまちひとに
のこそなおべし。此にはよくじめよりそ。此の一すぢなるを
ひとつ為にもつめ。だうりとなるは銭はよまもらし銭。
こそじたるひといふ数なり。だうりとれ。ひとまたなるをしら
ず。あく。だうりを知るもと。だうりは銭はよまなし。た

るとこ川乃ひがあなゆへまよひ乃一ゞいと〳〵ぬおもん
一かきさ語は。千聞一見にはしかずといふこと葉あり。
ちくらびきてたることより。一ふたびみさなつましたると
いへることなり。それはことふよなべし。あるいはでさるみ
かくされ谷蘇のむかしからつきおよそさい。くいうゑのすま
ぬ。人乃みめかたち。よろ川乃ことごとふるまひこきらは。
こきてたるよらうみさなつましたるへしめいしよきさ
世紀なども。さて及しるさみそくおさきたるおもわれ。
守まこよ記人と。春ましまさこし。さてそやまとへさきそ

まがりをさし流画く。おもかれてみえざくはざりしたる
うちわをかきさをれなり。ゆいてござをろくしれせいじん
けんしや。人間乃さ称すぬなるは。おもわれく。たふ
とし。これをあいみえさゝぬしかば。たゞ人なゆべしめ
とそれもなしをてもみゝく字もれをみれ人文がき
なべりす。みゆ乃めへいれきなどはよそなりし。もし
あいおんへぎてよりおとりたるとおりふへあきんゆ。また
のれぬとも文字乃うちれちぢへを。いちぢごとゞよめちと。
ほどかゆへし。これまくばかりとおもへしたくいぬも。

うらみくねん人あらくましてかゝはことわりなくとも心乃
ちゝ忍世まずれは他人をもありなんさやうれ人をも人
よそをせばしく、かくし。それにてくれざうさことの銭
かゝりこきるをせられば、いとありがたくらるべし。こきらの
ことはみちはうらみにてたるはましまくもやあらん。
こゝろでは千金よりおもくつんくはし一毛よりかろしと
又ろこと楽これなり。総じてもすぐさぞうとみるれど
こゝろをみるとれがうつりあるべし。こゝろをみる人がなる
色ごさくとも松本しかたんかみるまよひがめなく関はひろみて

あすくふんるをもこゝろしもしたがふべからす
一身にも他人をも我と我身それなるへをとくしもぬ事たかなの
はべし。人まいませずく閑べし。たとへ他人乃まちとも毛れ
よくつん身ゆゑにも我ままにけいかみがくし我よりもおもり
ともつ人をも、つまにはえることをばよくみぬりはますみ
おもそれつらさるにかゞみにはくつんるなにおそれどこころ
をみらまがゞみなれへし。人乃こころ聚をさくはかがみ
とすべし。おそても、おゝらは聖人乃つきたまへる文
絶書をかくみとすべし。それをもおもしろといはれ

よよつはえしとれをおりはくぶのこたろへがくみうれ
あわがうしいまへの文と、歌と綴ぐらべきく、これきは
見せくちそてよきこう、さうよ、たろ綴ぐみをはな思
一人これをかうれはねさくさしてといふ歯ことにむま
世は三ゝは天命なされだ、縁ぐうくがなさぬをもれな
がうよそれこゝろへのうふかく為世はすこりがうて、むり
よつをいたまいろうさでづりを天下ゆるとおうたるた
かくちもおれし地よるとつとそは、今をおかしもきうは、歌んぞ
ようどこともおれくよりきになひとみえたり

ばこの乃つうちつ縁ちろべし、歯さしを天命と人力と
乃二つよるを合くぶうにもかもなはこともりたとへば
松ハ雲枝ハすぎ、粱ハこうを、みうんれをかんとうれて、
ろうをうへくみうんやもおくしは、松枝まうかもあくぬ
をうん東ば、天よるをはぐきしてく人つきされ、およむぬ
見れなれども、まくぶん月されて、及ぶこころあり、た
とへハおかわつかのさがひハ淡ちろよくこやしゆ
き所乃うせござとよくしはうけどくうれだ、いうふ
もたつきよるり花もみをかんとふ、あちうひもむぞれ

て・おもしろねをうへ御中まし・一こゝハ・わかろもかくあ
さくがめぞし・これハ人へあらころわ・うへあきたるまくふ
しくをとも投うぞ・目れむもりとも・うけぞうきがげ
乃かきねはうち・すそく・おけむ・赤もがしけ・記もさう
ず・みもあちれ・あそびれやまし・人の男れらへもがくれ
おとし・わとこが・おんなまもなきれ・おんなが・おとこみもな
らず・あり出るが三六くぞやうもあろねハこれ天
めいろばごきの御こゝろをあへし・ごうるハ乃ちふく
小野小町もれが太郎まうけをまんげしきうとめ御

いろ御あふんつら紀乃ともめあよの御べし・あられども・おも
まれつきれよかろねものがよく・つきあぎれむよく
ありがたし・むまれつきよくても・おしくへありや
まことをれあり
一夜まかよまことれ・あしきまるり御しきことみよ紀
まへんずろれを・ぎれほりめり・瀬おどよきこその・だ
みこき抱れあし・まれ我男れけつき・紙めくし・さび
あさをつられ・うきぬあけらひ・くあてし・むゆくら
とあわ・あらげん乃ごとふきをあし・月の花の興を

もよほしよろづのはこさくびのしからば、ちゝのれども、
すゞおといふ一字みなくびにくうせて、あしきあり
たゞおさけすゞれば、ろくなる人もさやうへはちあり、
あるいはなにもならぬやうけんへをほろぼし、我身をもよ
おほすいさかひせぬ人もはなればにへそんしまく人
貴一れたらたる命みじかくなる也、ゆしさこにそれ
よ親まへんばかりへおぼゆるまゝに、ここえりやいと
むさぼひそしめはよかりぬもれたれども、みちをいよ
きこゑにへんずしぎやうはとまおきて、おさいねぐ〳〵なさるべし

酒とゆきるりぞれちかよし
一あるさ人のいふ人にむのうたあがりてしれうあるき物
れれ子さとぬりてあるしまされうれしれはあんらくをいふ、
ちるさこれまいはのはこよもれらばだかはるゝことを
あらあるゆへうやうがはさびふすくへれうなさきゆへは、
そらさふるもれをし牛まるとちからよきゆへまず
だきるるをもおちはらもれうらも、ちかさ食いへり
山はあそぬとゆへえゝ、あさ人のいふく、さとは何くる
かるか人もあれはけうくごろざんとはいまずまそへく

かんといふ事を、おれおりへ、みせでこゝろを虚(むなし)うするを人
まなしおのれがおのこゝろを、ゆるさん人は、あそびせらる。
こゝろさんとするものもれなし。これのうちあるとくるまん
かく人はむまれくみうをわくさいもなきさいへ人くるらべ
なしといふ。けふ何一つんまさいひかくし
一泰平(たいへい)にまつくるもれことく、おさめくはくさかり、賢(ひ)
寒(かん)乃せいがしふさやまし。たいらとなさて、人のこ
あるぞしいつねに下(しも)まくぶり、民乃くるしを試(ため)すを
かんこを、おの都めし、下の人につきまつりごとに

あくさがひ、おれまゝくれはとめに、おこたらは、かくされた
めまよかゝんことを球、つ殊まおりへでからもまた、この
一げいあ路をのをまは殊をよせ、そおれくまめしつかふ。
なまれこせる。けんなやをわくうちむらたみを
あくしく、上下れてろさしふつらじと路を、太平れ、在
とらなるり。ひそくれ在とへ上下(かみしも)は、たらまは、匆の銭
つき、あくさしでなよくし。あくてがはきく、だを銭の
しきをしられまかしきんへをでつちくれのこく
まおりひ、あかるそう。めでといふかしくふをもなし。

金銀(きんぎん)をもつ身をもれぞはよからぬ事のみおほくしてぞてん
まゝしまれ(?)ば心をもれをそばさいのうありさくもんがら
よくぞくやさみしあれども心ゆへ主(しう)をいらでまこゝろ
あくしくたゞこをもかくよもがねをそびしともりわおど
まうよくれをたうきみうりべからくれ主(しう)をたゞとぞふ
ほうをみせ家(け)うらよへ死かしてのほどくてしおもへ
さうんが大事をくそもとあらかくこゝろへどいさせても
無(む)きれし上(かみ)も下(しも)もうとよくそぞりよふけるところは
ねずみ城(しろ)ぞてもぞうちとせばわどこれみちこされえ

でぬまにぞれちらまびるぬまく人だぬ隠人みちらくさふ
人のうちをぬ隠しい是をとそり弓矢(ゆみや)にあることをうく
がゆゑにこれをたとへくれよのつねにふかきやまとにふか道
ちう(忠)は家人は天地と見てくがんかんせうべし天地
の長久(ちやうく)ましますはゆへあれば日は陽をてらし
月は陰をてらす日月は臣なり君臣の
ほくちをてらし陰みちあり風雨(ふうう)時節(じせつ)たがへず一回
へんしをよこたへすしくて下をめぐむみちたり
沈む雲霧(うんむ)をのがせ陰かげあげども上をまもるみち

おこゝろは、雨にされくれ、いろをみせ、花ちらさゞるが
ことどもなれば、こゝろざしつよしたるこゝろなり。これを
をつくれるみなみより吉良と、南なるをもしるれ。
天一月おこうめくれば、地一年たこゝろば、せかいの
みなおうへくちぬべし、人のまゐりことも、天地乃
ごとくなれど、たがくつまり、おもいあれ、え
の色みじくしくかなしく
一徳ごとに、つねとふかくもなるべし。火(ひ)は物をうく
かし、ふかきをすゝめは、清ねなれども、ひらうくなく

まあつくさけなるは、人ゝくかくさまの、いのつじしと、縁こいはく
こゝろへは極めて、むれぞは、はしりまくゆく滞(ゆき)とお
よくきれいなるをおせぞれせらくなきようかんと
すれぞうつて、あげむ人のくすりことはそれも
のひさゞるごとくせてさゞるそとはからず
一過(ぐう)不足(ふそく)といふことは、人の時よにあいさぐを時よに
そむろうとの事なれども、物ことよあるべし。雪(ゆき)は
うくよみ、詞つくり、茶(ちや)の中しやくらかさりなく
ちやくらんせら内くほどるは、暑(ずゞ)さといふべし、ちうれども

そのゆゑんは。さうりすいんにはよくさうかつくほどなりふ
ぞくとうぞくし。貧のうへのまゐこぶおたあれども。
かたよあり。はかりがたしするにあらず。禍をまね
く禍なるや。ここにおいて、やまひをまんずれども人のくめまれ。
かくきばかりあり。かくれさぐひかりてしかくさつく
すべからくよ人のかうあやまくいたず。聖（せい）人の代には。
賢（けん）人や。学文（がくもん）しやをとめもちゐて。たゞやすそこれ
ぞくあり。秦（しん）の始皇（しくわう）のよには。ものしり学文しやを
ふくむ。これなぐしあり。むびやうなるんをうそへりをを

あくまでにさけをのみ。あるはまたみだりにびんやふ
ぞくなる時より。そくむいろいろとあそびし
さけはこのむ人おほくのむべし。のまざるもせんこともあり
のむとて。ねる人のさまにあひだくちうちのごとき
をのまずしてすべからくは。あくまでいかなしき。ばかりて。
ぜんはちからのせんはつねにくすりしずあらをど
をのみし。酒のほどりまで。なるをうりて。山中にかく
たき木をとりてはやくかなしきこともあれども。むちうちもさ
なく。病人老人（づつうらうじん）はかなしきことあり。山中にありても。

我まゝなる人ハ、かならず学文しやけんをや
のがれぬやうにて、うちへいるときはやへうり。
からだもがらやつれ、うちかたどうなるもいかるべし
ぐびちくんが孔子(こうし)もこうしめやくとおもふまゝに
一人乃一期ハ、百年とハいへど、百まで之すむ人ハ千人万人
の中にも一人とも、あるもなきものなり。まずすこしずつなることなれ
ならはことにすまおかはなる。春二月九千日
のあとなき花もくんがくて一生涯(しやうがい)のことを積むるべし
正二月のこころもてれば、よかんばりて春さたあさし。

草木(さうもく)もいまくはんるゝ、ずずする心はなるにて、花も
なるべくひらき花、柳(やなぎ)もみどりまされて、人のこころ
をもうきさせ、あそびたかるまゝきしやうらん
せんかをおもひきりおもふて、あるひハ菊いへくはらんて
程さんをはべ、陽ききりがいとさざりあるども
これにて、むるしくきしとすごし、ワの祭に存りて
又なく人はありつ、あるは花にさんぱりてざりあく
日をれとやうまるおりまおいく花みる人もあれ
めれども、去九千日九うち、又ある日十日をはえすまさず、花

なく夜かへるほどつらく、又秋はいてまうする人の
百年も、これまでは有べしはさら〳〵なく人は海のせ
て月日のたつをまつやう成ことも、ありぬまでだ、
秋の弟ありてざいしよ有しありべきことで、後いよ
なき宮民のよのこと悲しかれ、浮とめはいとまし事、四十
五十まゐりし人のたのしみがいかさま、さねこゝろへぬも
おこる命とおもひあんずるからは月日もやくらう
あふこゝろは、身ふりてれいそうしかうしどゝしはうきぬ
何かしよそこびはひまるありしといひ、人のなげき

弟れやまひなどはうちまぎれて、花のたよりもよそし
ゆめれてくまずぐし、いつれもまふ候らんからしろを、
うらはゆきそうどのろ何となろはさもせずすみうてとも、
こくあうも、おもしろきほ、くものもおらのひたがへ、
もともよってあり、いつのまふかくはあるりてかくみのう
けは、おどろきそばくすらこて残りかうれてとれし、
そこもれくぞそしもれくよくれ事も紀ぞうは
て、たのみし残しらば、云残むきてとぞる
ことぶしやうをうけ、成事も、な紀みくはらん、

たれしこはごめんのこありとおもひぬべくもなくず。まかりし
ことも、我こころまかせて、たのしみなるらんや。そのことをかね
すゝしまらうめくおもくすゞそ、おしきものなりけり。よ
ことをいさむるさぬまでぞ、たることなり。さるわかきむきさ
をとかせぐらうくにし。ふるぬまたうさもいやしきを。おもしな
さけあるぐしでんでくれ身のしこへどもそも。てよ何たるべし
ことの望みにあらはれぬことふかくも、すくさ悔みこれ
我こはこそ金のこと業もあらぬべきなれ

一人にかはじめくまじかりてよからぬことをなすし。そし
こころは我あるまじくげざいを備らつき我法備べきには
さらぬなりたるふて深もなく使じかりてがくりむ
ぐさむは我のしかららぬ人をさしおかり。一例の様子
みりおおしたび色はつきそていさぐいはよ。つぶさをとの
ころしもいひくよりすことのこれとおれしおかれたまくし
またらくなれあいぶこ我にみをそわりせられてつ
とみうらむることなんありだおおしいちまうちに

すみうつしめされ候ハおろかなるいろはかなへよく
年月を経てりうおかしきこゝろよく候いとあさましく候へ
中れよ紀ハまれなりさためやられぬ人ハおろかなりす
をいてむかしのことく候はらねてもうとくなりそ
よそめくるしきされともおろかにかくいふるは何ゆへそよ
ならぬとおもへるをしめハたゞいはゞしみありておもふ
しなむゆへにまよひかくぬこゝろもちまたはなれく
てしうせんよくくいふ女をもれさらにくたしおもかれ
おもいあゆへあるらん人ハはまるくもはしめれころ

あさましきことに候女の中立しめされてよろうし
おのづからもよろしく別てはかりごと君臣もかくれなきこと
一魚の水をはなれてもかくされさることなたれしこと
らず。あるハ実をのこゝろをあさましきゆえよ紀をし
命ハ人のまことをかざれはこのしこれみちをしる
ろしされとして一やうにいとこゝろ候はん
おもむけやうよくよろしくよろつしことなり
こゝろれはさめやうまはよるまく何事もこゝろたの
しらをなしみしゆるしはへ人はまよかすみれ

我はあまたもへば出されくめは法名はゆく里これ。
山路も川もゆくさし捨さんれくあま行明なる山の
けいもきれあざれもみれおもしろし
一あみ仏だしやれいへるをからもあみだれわやぶ
きずといふ物こそ聊しからむすきはこころのすく。
やぶるこそれしごころあんぞやぶまんや。これ法
身如来金剛のあたふといふそれのとりえかたかりさま。
まことるへありていはくふくばこそは申されども。これ
まくはあるばからあみだれはやぶれからくくち

なにごともれいやぶれやすしこしはなべしふきめれまゝ。
いゑをたつくるそんまごゝろよりほせくそれおくして。
こゝろやぶれくは命と眼が大事れ人のあみだご
ゝろはやさしの眼くしてこゝろやぶれくうへあとある
これころれきそれをやぶれやすきことはりたずや。
からだ阿弥陀それはやぶれかくしとくみだの山花ごと
き。大山大岩くろがねのまるかせ。かしれものは千人
万人のちからふくても。やぶりがたし。海くやぶり
くもすくおくこゝろまでずゝこゝく紙やぶるも

かならずしもこれを座ありがたくことにあらずや。仏法に
空有のろんあり。いづれ經よりもはじめなし
一 經に盂蘭盆といふ有。七月十五日のことなり。それまへ
をうらぼんといふはかゝ世俗のあやまりなり
一 四月を卯月といふ。説うし。それ卯の花ハあるは
四月からはあしくば。又卯の花がはくゆへに卯月なと
いふもあらず。卯月はほく花がさくゆへに卯月の卯の
字をかりて。花の名につけるも。卯の字ハ茂なりと
茂のこゑと卯のこゑとちかくしてかよふゆへに卯月といふ

しげる月といふこゝろなり。史記に卯之為言茂也言
万物しげるも二月の卯の字もかくれごとし。然れども
和字ハしげるといふこと。綏ハ夜ならでハしらぬ
ぬゆへにしげるかなといふ四月のことにもちゐるなり。
二月の卯の字はなりて四月にもちゐるなり。四月は
る川の草木しげる月なれば。卯月といへるなるらん。漢
の注にハ四月をすうとあれけれども。しげるともいふ
字をかんあるゆへに。文字をやぶ四月を卯月といふならん
一 五月を五月といへば。端午といふことをかくはなれども。二月

三月の三日ハ、だんごといひ、あらんハ耳よからで。
めづらしくござんめづらしいひあそびさるま海をせて。
五月五日をばたんごといひさよろし
一南花(ちんさ)といふ人のみち紙またびべく、偶言(ぐうげん)のよせこ
そ衆生よくよろしくんあり、それ抱ぐるりこうあり
けまこむる馬有(ばんゆう)といふらかん、何有(かゆう)といふ國へゆきて
て説法(せっぽう)ありがたくのべ人をすゝめられしきろまゝ、その國
のくがくくみさだ成をうけだつとむこと、あらうとえ。
しめぐしきんれごとし、はじまりよ、よく成んりしさく。

みなつまをとまゝにをとけすて、しる日つけまるまか。しる西紀
をたせしみ月、つまやこぶし、屈るあへ田くたまりて。
つまとごとくあてハまをそうり、たまく、はまよみいぬぞ。
ゆきがたしく、ずるりまきり、それくち、しる西けまたれ
くあへたらを、ひとりふたりづゝとおもへども、二千年
がうちよみかおしまえて、國草(こくさう)だろくと、はまもこ
て、きつねだのまされ、ずずくあり、ざら、おのうちむい
みるひするまよりごらかんも、いれちあやうしとおもひを
もやけどすべき、しる西じやうなしとて、二ツハ城さし

てをびさりぬせあくされらず。寂寞(じやくまく)ハ至人ともなきハ
けざやのくすきかとなりし人のせらいをたちく他のま。
それくされらの人我ごんなくとてこゝろひくさ
らかるへからずしとかきまり。我くらなきぬ
こと也。ふくすずきく他はよかきぬといふらぐげんり
一柳(やなぎ)ハみどり。花ハ紅(くれなゐ)といふこと。かんなりやすざは
さもあるまじ。花なるしきにあるは緑ぞこ色なまり
とらずや。こゝろよく他ことは花ハいろくあれども
紅錢をいくからとうす。雲まさもに。又さきハあ他も

のあれども。五行(ごぎやう)と四季とあてゝ。春ハ木いろハあをし。
夏ハ火いろハあかし。秋ハ金(きん)いろハしろし。冬ハ水いろハ黒
いろし。土用(どよう)ハ土(つち)いろハきなりと。されバさ程こゝろ
をいふなり。春ハ木なりけれバ。緑もはなきものハあ
らず。秋ハ金なりければ。いろも水もあきらかならずぞ
いづれも五行(ごぎやう)ハつねにあれども。四季にしたがひてつかさ
どるところをとりて。春ハ木をもつて。秋ハ金をもつて
といふなり。花のいろもあかきをもつて花を
紅といふなり。みどりもはなはだしきは黒にちかきぞ

それに陰陽ふたしんあり。春ハ木にて陰なるゆへに、いろ
ハあをし。赤(あか)き色ハいろをはなさゞるゆへに、夏のあつさ
いろ紙つよきとするは、いはく春の木よりあかく
あかくなりて、ひをうむなり。木ハおや、火ハこなり。
木火のいろハあかくして、それよりまた土をうむ。花ハあか
し。夏のいろなりたちぬれバ、おやのまゝにこれをくりで
こまく木から中ゆゑに、花ありておほきいろとはなさ
ざるゆへ、おほきハあをいろなにこそゆくへなりけり、ひへなきなき
なり。秋ハ金(きん)にあくぞれいろあるしかも、秋のこハ冬の草木の。

それいろハこたへたるに、秋の花はしろきいろなりいん
こそくはらく。春ハ陽(やう)なり。秋ハ陰(いん)なり。それゆへ陽(やう)
するむまくはの陰(いん)ハしりぞくわかなり。春のきハ、すく
むゆへに夏のいろをいでて、あかし。秋ハ陰(いん)にして、陰(いん)
ハしりぞくわかれバ、土用(どよう)のいろに、しりぞきしらく。
草花ハきなる紙陰うきとす。土用(どようし)ハ四季にあれ
ども、夏と秋とのあひだのごとく紙ぜんとす。草花
花ハ久しきあれども、きたなく、秋のつぎとを
するなり。草木それも、秋ハみな花(さき)いろになさけハ。

あらはるゝぞさて土用のいろをみるになり。冬く
はなれど、寒なり、黒はいろのうるけれども、冬を陰
なるゆゑなり。あらはるゝぞさて、秋のいろは白くさ
とみせ、雪霜。みれしろし。それはつきていんあり。
花は、いろくまじりてはなる中にもこころきいろは黄なるさ
かはいうらく、いろく、草木は、露のめぐみによく
みえたまし。たとへばぐるしみするとはなり。
木も草も、枝も葉も、花も、みなみなへんずるなり。
このゆゑに、水もつて雪とれ気はる。金をくむしらはな

はなれなり。えんがんれいろをかくしてあらはさぬをも
しこえがんれいろをあらはすれども、花はこれころ
がうし。本性をうしなひて、こころきいろをへんずるなり
ころのきぎはうすゆゑなり。ころきは花の色しかし、水にうつりて
ありてさいを得てきいろゆゑなり。人のこころこれなり
なりて、この世のすがたをきらはるでごさる。ある
そとへはいでぬをしれなり。水は、からはなれて、へんきれ
いろがなりをとへ、あらはれて、こころさ花は、れくれ
される。いろは、みれ、あらはれなり

一よろ川なり小事もせうしとらふことゝはりせうし
といふ川のせきはことばかり横川のひろさハ二町
と三町をはなれ。ふかさせハ二けん三げんはすてさず。
ありふるやうそれほりぞくりのとまるをふかく
ゆゑぶかちがうらふくハ。ハ橋川はつかまく。せうしの
はさ河り川のすゞくれ。きをむかくれしくちゆゑ
まとれあるれど一やうくれ。きうちうらうくりてまゝき
アまぬきもあるれあるまれはすゝれあらゝてあら
ものあるれぞ。ひとゆゑまずんぞこぞざきいゝてあゝき

まとおりてゆきやすし。武士(もののふ)の陣(ぢん)をとらうがせんため
れぞむさ。たゞしとなり。おくしたるものもかゝる人
もかゝる時なるべきときあらそふところありてきちく
ありて一あしをすゝまれぬところありそこゆゑてハ人を
すゝむゆゑよせうしそれはらへるときをふくハすゝむための
なきゆゑなびろし。それひろきところをすゝむ人をせ
うしといふなり。せうしそれゆゑみくハ一足(あし)すゝみをもて
うらとむかひのとゞか人をもゝむべし。せうぶのさきうる
ありてハ一寸のこともたゆむべし。人のうちおくれみなもこれ

こころは。陰経よりあらはしがく文などもかくれごと
し。ずいぶんせず。ぜうしへ。二経ん二経んよりすぎず。のうらいは
ひらりゆくをみれ。あらはそれからろげへのうちをかくれごとく
あるんらうねのやうこうをかくれごとし。人すゑくただ
まもすなわちやうこうへぜうこうちさわざりやうこうあはのを
つぜうしをぜんと。却もうぬことへ。ぜぬがましあわりおもふ
ごまろし。しかくことところ。おのんこと袋をとじめとなる
こころげて陰をみるがくきなり
一ふせねもえ人みれ。をくゑやし。志やうつゑへし。西えん

ちとぜがへくふされこををちるばかりこと表わし。まいり日月
のひかりほどだからえをのへおけきどもさしく
そのおんをかんぎをのをみれハあし。本のされつちられ
のひかりをはおとけのみちをかりてあはなけ。あり
がくしとうひきこえ妹。草本れ花のやし紀まはちさ
みぞれよのハあるるぞ。ぬすなをみれなれども金銀
まかへくをとむろ人。をことすず。恩ハそれをみせく
かさらおもをみれあれども。かりむかうしれたん
わんぢ草花あるど。千世のこりいかへくをろく

さやまど又あんあり。これぞよくふかうるものゝふしん
すゝめしたるはあらずや。又みうをするはみれぬゆる書
いせのまいおんなおとこ孫のせものなれども。その玄
まゐるまた大じ急によるなどありとて金銀をはなれやし。
御しやうまするに一ツ忠ありとても。むさとあるし。
世けんのみちをおせもれぬ世はまじ火を焼ことなふ。
弟は志めくぞちるさるはかくへくききふく人お浮し。
をおこしのゝとてくれんをもむりしをいまそこれ
ことは紙のへじなるふえあん松斎

一人のすきこのむことあるがよくぞやめよといふあそび
そくばりかくこきもれなりそれはましたることあ
まそなのつきごぶ御るをもれなりたとへかろく
そとりかものありてをとる事一せんのくらふさんば
うかやうなことさうぞへはたゝかあさるいかをよはな
さゆるは人やあしといふぞもつゐはやめばあるへ あ
らずなんといふつきりをうかばしつまりは万病のくす
りとなるゆゑ一二ふくのめぞいつどというふ風をいうす
やとうのは人るくすり御もかうずまして一日のはしむ

そうんと三ぞくんもうちとまうけられなどしろくくり
これをあらいくう御まおもうくすしくあれるぞく
ともすけまでこのあさいおろくくりすぞいも
ましなおゆるをもれづうやうろくハすそくうれ
あらはあらん〳〵あだもかくれどもしきは父さるをのある
をかくつくよりあしくいひてもやまひものよう
たとは御したる人あれどもとのがらかやむもみだり
それも君うしこゝろねでましをおとりもして
そのつゝまとおろかなり

一ちゑあるある人ハいはなりとありおろかなるなどをのべ
まことはりおろかにしていはりもあるもれハ下の下
なりちゑはりてまこともおほハ上の上なるべし
中の人ハこそよまなりてよきまもはしきゝもうける
時はよりてさることもはりうそもあり
一しやうゐの中より蝶るほどあそびさかづれ人との
まじあるとれハはじまれどもあるのいやとはき
てふらうめぐたさ出きれるハぞうしこたおしまつ
つねにたゞれおそれあり雷の時はことに恐なし

ち縁にむしはなりぐさまれ。おそれもありたゞ蝶になる
うらやましけ荘子といふ賢人も蝶にけしとく。
ゆめに逍遥しく。それくこのしとかぎられとおもき
さしてもかうさおけるといへど。胡蝶になりとゞ
まくらて。童子となりてからうまほされむ。人の
それしことなき身にもかゝるまで。もとかくし世を
のへみれ人れうへをよそのよりみそくに。あんらくを
やうにみせども。それ身くよまりてからつまでもくう
こゝをあるんをうつさらうてくるくろうゆる松風の

おとくよめりしげますも我身ならん人すこそくしられさき。
まいれ月見がらしるは我ふしたくをびゆるくまうつく。
花はこうふれむ。我やまとめ。わの後ことに風くおあそぶとこ
ろく月見くまふあふきとそうかてさうすもはなとさう。これ
ども。あいうけてゞいのちあやうきさみてもありがたきさんぞう
あどさうぎれくさうかゆぐんするさうてうろゑどさうんとす。
さるぞ。我は本ゆうて座きすまんとすれむ。なりあふくさ
たりて。ぜあさみすゞ。すゞしき。さまれしくもしえ縁をやとめ
がうくざい念んのあるりまうげうらうがらうしちやうき縁のなむ

はづかしと思はば。おさなきこゝろにも。たしなみて。ならへかしと
まくらもとにをき。すくよかならずてられ。
ちんじ申しやられ。こゝろざし。あふぎくらべつゝ。さらさら
すまぬ事ともあれば。人をしをれちんと。わがれるゝいに
のちあるべき事を。ご存んとも世をへず。かをまたわれぞ。
一 百にしとしをみ。あつくはめと。一さゆり。身まし。はなれば。
あまねれどの。こゝろあるべきなれとも。きんくもてらのさ
人をおもひ。あさがほのはかなげなるまつれどの。しこみはず
らしさきなさをやせんと。おもひくらして。よびゆくなりと

かさりすてゝ。花さかりぬ。これにはなくとも。おもひはべし。
生ある物も。おなじこゝろなり。御めぐみも。みれのかずまんと
おもひて。花をのしむるべし。たとへうき世とても。
さようはかなくはなくとも。たよりを。むかしの人の
ふんてはきさくこの。しこれなきさまにあらじ。
れくはなしきも。あるくぢなるも。あくよろこびてあるまじ
さきわたる人の。こともく。およそ。人の。あるこころあり
あらはつひはうしかず花とこゝろを。はらしんのへて。いそり
一 春は花。秋は紅葉と。みる人は。しやうきんし。とて

あそぶおもむき。それしかくおもしといへども。花もみ
ぢとはかららずんでみれ。これはつきざ。
うろへはけふくきさこころぞはかれ。そうじてふごとを
みくたびへぞりがきさちんどころへ。みてかしとは
いふべかめれ。花は一年中。わきざさしにいくらずもまた
あり。むかしよりちりはつれまよやらん。ほどなく
ちりて。ふたたびちりゆくことあらば。さかんなる人を
やしなふたよりもなかるべし。まさるまでみちたるは。あふさきるさのうつろひま
て。花ちりてもおとろへ。とよめるごともかなはず。ちなみ

させるとよもかくまたありがたし。いろばく日よりうつろひち
つもく。やむことなし。これよりのあさぎよめするなるも。
うとうとしきそばらふあとよろし。ちら紫がさる
り。秋すさまじき頃。おもふ霜枯るるごとくれこそ哉
めぐりきたれ。おもしろきこともなし。志ある花
ね紫とく。恋やみせざれ。詞はなりうべきまま
み。あいせらゆゑを。それなくこしきへいかにたぐるぞ
ねのかなしやさきこそみへみこともてぞれあちかひぬ。
よろしき人をやしなふたよりなりて。ぶらくおわれ。

そのハ秋乃さびしきをおもふ。それからんなどみしても。
まくらずすぢやうけのぞらくをさゝよめなますれあい
きゝやうもあらそうかうずかんぢうらははるかそても、いさぎの
ぎーきまりてだんの川にてれぐらしまも妙ゆゑにれ慈ん
つんまもかゝるずまぶ三でうしまおる正月のいさおりまけ。
いふきや都のぶからとここ祥り。ござりしもそらしの
かんあり。あぶかさいわりおそめもれあ。すぎにいゝる
まくふあさまようあるもれあまり。ちゝきをつりとき
とあかるつかくぶんをやしるふまふようし。これられ

よういいふもれをほしこゝろくどようまもあらぬ。花
紅葉鳥あいせることほうまごころへかなしきをいへ。
ある人氏にいへる古風にまだしつきあることを紫萬れ
ども。いかにしへよりかしこ紀人詞をもうくるもよそ春秋
の言やうらん。筆くまたかしぼいらき海のゆへあることを
なるべし。こゝろをすましてよくあんあるべし。
人乃身と心と頃とらんゞくいづこにかだのときぞそおもひ
ふまゞへの身なて頃あるゆゑなこそ身も人間とけ達。
いかなる。ござんみくも。高みんまくてもあいきこの

かくさ中よりもこころはつきぬまでも、むかしおもし
と、野山はさそりすてて、うちとまりし、みちのおく、ことも
いかならず、衣をきれし、あはれどころか、身もよりし、たのとさ
ことに、錦の袖のうらでろうくでいかにら、あぢのひ身をも
風しなかたよう見れども、ふかうさとみたくころ、錢
なごさむことはなし、ゆやしきをみよくも、花を
みくころなかくきめ、さして、あくかまさに、ゆくまで
ゑよくしこもしかきめ人れなりしいが、物をみくおく、
さむことは、あらし、花の衣、錢まちくかこころふるお

るねむくにもよるこころみれふりしたる気をはべんと、
ゑなるさはいろくみれ、はきこみずれたる花さむらひて、
め錢よろこそくしめ、天乃よ錢おもひ詩をはくそりう
さい紙よみちりぐてなるれぞ人のさうへ、おとろかう
よえぬぐひしかざりなるき、あかれを、きよかず、それ
さりなもなさへのさけをうくそうひきるさひこころを
取ぐさむる中くら、花ますぎるか取て、和歌
こころよなりぬ野ばは、筆代はりゆくぞてみなんの
をやさこと錢、おもひ、紫ゑひのめみけれ、よみのあさひを

なを入ねんし。老のゆへなれば。こともよかすす。海ことゝもさうろ
はなはだくさめでめ銭よろこばしむる物。死後ふかり
ふかくいるし。山ゆへまや。あやまりごちをたゆとびずして
死後築銭たゆとぶあらん。これをやしなふより。
こころをやしなふべし。たゆとも死ゆへあるとも。ここにぞ。
ふかくなすへしうればく
一人のこれをぶらるおしきことになれさせず。わしき
こともまじはらせぬことは。おしまずべく。おやをうるまれ
こころざしあれども。せんかんかしなおやのこころへかんよう

あるべし。我がここはあらぬとぞ。我がここに入やうにせよとぞ。い
かりなきしるべからぬことなりこれよりうねなありて
わらのかたなるはしたえもふかく死べきことともえ
すうしきゆるさず。せんかんして。やあずんれかるべ
からずこれしのよるとももんまをれはゆうる銭らんべ
こころをはいらかどもわるさとをさせくみるやうにせよ
しあれりせりくいなごれてろゆけてはし。ふか
のよろこびてありひえつけるを娘しへきうらひめらうら
すなりけれはこさせぬことふしたのかんべへてわうふうけ

こゝろ人の上下あることをしらせざりし。されば法くさ。
ちよくぎやうのおほくれば。やゝもすればおのづから法まげをこそ。
すたれゆくまでもなかりたるんとさ。一ちやうらいの事
をまもるべきことなどをしらせ。士農工商のそれぞれしよ
くをまもり。法まつりごとをまもらしめ。法をもつて官
にせざりし。よかゝらぬ人はあはれきじこさるまじかくれごとく
をしへおきさて。ゆんほくのうへ天心にはかりてこゝろへさせ。
すきたるよく法を用へば。ぶん〳〵をまもりて。世は法の
治まる。然もこゝろやすらんことなり

一 むかし七十子にあつて。嶋の一つ字をしらくといふことよ
ろづの事しよみてかいわるつ字もぞと孫子世俗
の人は何事おもぐいはあ法るつ字をいひて。
せうもうなりけり。法家がらの文礼儀志
の書には法ゆ思れさきまけにゝのもるをつくり
て。らざるもし。むかしくわざりんなはけぬとしたるつ字
まくらてありまり。老人はかし嶋一つ字なりつ字のさ
きまぞうとつゝうもさわるやうらしくなりまで。ゆ
ゑうもよくむせぶ也なり。嶋はむせぬなり。

ゆゑはむせざぬやうにまもりふせぐ。まじはりあはせるやうにしよ
つよきがあらそひはまことになけれども。まもるかたゆゑあらそひて
一所のあいしやう釈みる人よのさきをんれ。はあいだる
あれども金と火とは又水とはあれども。はなはださ
とてきんむすびず。すみとりてほさてとをり。またこ
うちやぶりて水をひきて金とひとつくにむすぶ
人あり。これは中よくしたるゆゑもあり。又あいしやうの
ごくにもあり。これゆへつよき。まさにふた人おなじ。
うちとりては火をのぞみよりて。家をいまずがへのぞよ

みて火をおそれず。家ととなりあはせくらべて。
これを言ひつけ人まれなるがゆゑは。あいしやうなれども
ねあはせたり。されば人むまれ金とこととのりつしの金の
ひとをいまだすつちのえいぬの木とつちのとゐの木
とかねをおそれず。されば人ひのえいぬの火とさのとれ
いのひのえとこころずすつちのえこられつちとはらの
とれ卯のきのえ木ところずすつちのえつちと。
つちのとのとれば木ばいまだずかのえいぬの金
とかのとのゐのかねは火をおそれず。つちのえの火

どうれとのうしのひとうられへむまれ火をとつちの
とれひつじの火をとび四つのなか銭いますすぐみづのへさ
うれなとことみづのとれとのなとことみづのへいぬのなとく
みづのとれいのなとび四つ。みなはらをおそれず
これみな。よ絶あいしやうとなるべし。び木の水なる
火銭なし。火穴くねをとうかし。金へ本銭二さい本の
つちどうがら。つちみなとまでとず。みなれあしき
あいしやうなり。これをよくくつきまへぬまうえ。れ
ならし火とかねとは。なるとひやまずしにの銭つく内なる

一廿日くらとどうくいの事なやくしれせうどもして
こなそんの壬れ四十九のん銭つゝしそて七と四十九日の火を
はじめ十三伝の火銭なそてごすうねんとはじむ
いろくれさぎはれども。たううもあうさらか明らうす。
さきてたるところもあり。さにてぬところもおゐし
んはなほうけてたまじねとしかうくらず。五行
みれどもとくかくしぬまでなすると物のちなり。五行の
なし銭十かんなす二しかくうつらはくふせうりが十かんとなし
こさのへごされくまなり。ひのへひのとかなりはらみへ

つちのと土なり。かのへかのと金なり。みづのへみづのと水
なり。さて此五行相生相剋をはかる万物とあやまるべくさうろう
すなはちこれにかんとりまはるなり。相剋とは木より
火をしやうじ。ひより土をしやうじ。つちより金を
しやうじ。金より水をしやうず。水また木をしやうじて。
めぐりやまぬをいふなり。さうこくとは。水は火をけし。
火はかねをとかし。金は木をきり。木はつちをうがち
土は水をふせぐ。これさうこくなり。七めぐるまで。さて十干
なり。さてこれ目つけるはくらなりぞ。これ七めくりまはる

はなはゆやまあり。人のあらく開る紙にみゑぶふかき
みくゐり五七三十五日かくれ。みれかよぶこれゆへ也。
ありし人六みれさしゆきは。さらくあなた人とぞじめ
くまじの開つきとる人とまつゆやま。まゐふきあい
をはくなりぞ。これよりのち。四十二日と。四十九日とれ。ま
七日みなりてあはなとみれすこしやまでぞ。あらはれあくせ。
四十九日ゆくみれすむをいふ。六十二ゆくく一めぐり
すむなり。三十五日ゆくすかんはすむ。四十九日ゆくすにし
のめぐりまゐくみれすむるなり。十二しは六坤とぞ。六

ふびは。めぐりすぎて。四千二百也。それより又まへ〳〵。七日
まで四十むまれかはれる。かんやう五行の気なり。
あらけまくみれつきて。四十九日まへ。色も形もなんら
いの。天地へかへり。われらおのれしふ。それをさとやく。しまれ。
成仏ともいへるなり。さて。すがたせんめいはなりて。あ
らたまるなるを。いふなれば。これへより七日め。かのへなり。
これへの本来がのへれがねかく。ごくす。四十九年が
気あらたまりはらはるなり。ひのへのえいへ。七日め。な
れへのあり。なれ火をこくするゆへ。ひのへれかひのこ

七日めは。はらはるなり。つちのへのつちなれば。七日めには。これへの
本なり。本へつち根こくしてやぶるゆへ。七日めはつち
これは。はらはるなり。かのへれ金は。せんめいひねくれ火をなす。
火かのへねをこくして。ごうらうすなり。みなれへのとうは。七日めは
つちれへなり。つちのえなくぼくしてはらふなり。みなれさ
つくるなり。たうれぞ。いつまでの日まそくで。七日めのくま
あくる日なり。三十五日。みかつくはるなり。これをおし。こそ
七みくまはるか。たやくきんまで。おし。むかうるなし。
かとけまかずして。よろこぶなり。又十二月。めぐりまで。

かくれごとしらね日よりて七日めハむまれたり、福とはいはま
さハお御やとてたくがつくことにやずかくなり。うし
よるも宮のめハびはじめたりしひつじもはらちや。
とちはるもがくれごとしハつまもちめまあらりて。
けらし候月よおつ鉢ありて十二てはむ女のさうちゐる事
は申ってハ六七四千三百めまでかん十二しハことにあらた
まりうりて四十九日をは八条のとこうへむかはせ。
かぐらをもしらずや。何事ぐんハおがみそのくうりさる
人ればとちとなわしわがみ肌あらたまりてへんじく

ことわざばかりのこさるゝ人ハ、まくにのこり。おもかげハ
目くはつきれつかずに形をもるさればこそくたる
中まくらをてれちまハるうちもわかくたちしもなく
たまりたてはるハ一人も死し我もそれらずまぬれ
ぬとごとうりをしらで、されどよくはならじ
道にハおくべきことも。なしいまんやかくこそのあらん
や。天竺をいへる、釈迦も一字不説とのたまふ。志わらなれと
も五千よくまんれるまことにかり。孔子ハ春秋二百
四十余年の筆削あり。大忠園悟ハ地獄の記みれ

むかしかうん。さまだ東坡といふ詩作は。渓のこゑ
をきゝて八万四千偈ときゝ。歌人ならば。ころびそ
のこゑがらハの杉をとみ。則ちうとこゝくびさう
しをよろしきこときゝ人もあらず。まし
さんごよもれうゑありとくきく人もなかりしば
あいさゝ人ぞなうんがけるをれくこゝろハりと。
をかう持ありをさ肉すぞくゑさてまぞかへて給。
これをとよてぞんこともうすぼしを。ゑきあらん
まもあらで又ゑきあらんまもなうず

一いにしへはぜうりうは代ハ徳のつゝしみとんゝく天下
をおさめ給ひつりそれよりのちの世へ武やう
とぼつとのうちあくく代ハ弓をさめ給ひへり
しやうぼうけぬまゆば。あしからさもれくごら
とし武やうハたゞきんへみおもよおびしぜんいや
ちうさうはおすがべきをへ武やうぜんありてもせんが
かくあしあうごとし。大臣んちうをかれども
禄これ皆をいろごくるしてかしこきには
つるてもこりいはしぐことなるゝれぞんのつくさを

ひまじみてよとおそれずすゝむしがりそうりて
國らんそうほ下はへおんだりおこなはく
しやうなけまぞれしもぜんまするむところなくて
みなとさなみ人をうしやもおそとしちぬまば
つるもあらぬところへよくぬらくなみゆへは
いくばまたくみんおほくありてつまへみ
よみちらんずつやむことなしいたやぶれ國
おろびされぞやまずしやうハ下ゝくまおよび
だらハ天男をゆるさずれども上おそれ下ぜんます

む國などく民ゆくくなり
一みなかしくうりうつしかくうものありいせいけん
へいとまでもそりすかりしみ人まかりてよく
みなほそのへやねそり利ずくそしたる家金
世まん金銀米穀もめしまかつかくしくりや
またうの日銘のまんごくそのみなひなうんり
一まつりごとは寛猛のこゝろまぜすずそうん
とみゆるやうなる銭いかまうしとハあけさとといふ
よろ川の海つりごちたけくてげしこれぞ

万ゑんにつきかけて世のしきまあくゆへに
いつまでもゆるゆるやすらかならずされども
ゆるやかなるはすこしもすたれ人よろづはお
こたりありてなかにさゆるは世にうれやすし
それここをもつてたけきことをよしとし
二つならず万えんのそこころをとらゆる
いつもあんなくあつききみ常をかれしそだてず
つまよりあそびがれく危もみてあるかな
なつよきあるとみなくまつえんまう此ことは紙よるべし

一天の変といふことはみな此よき人のつかりなる
天地のきざしとを人此こととひなりて天地のことなる
づらまなかかりて人によりてなんのことゆへに
日月星のいろ此ら御もひかり此ら御もみな人
のつよきはづさなり人のこころよりなりき
まつりごとのよしあしきよりて人のこころ
あらはあやうきによりて日月それこころ
まつりことするつよきありてさまへさまる
さ日ならの御ひかりあれど君も御人の

いとおそろしたまのくらし月みかづきあれども
臣下の心をもちとなれしくらしまきれさき
さき婦人の身をもちとなれしくらし和まし
かりうたる事ありあれどもその為そのいろよりもそく
為に事あらんとおもうくそれ聖にならいもして
よし我身れ行ひをなをしまつりごとを続
ふくこそ天の災（わざはひ）はやむことなるに神仏ハ
のるぞうかて身をもらん持（ぬもち）をな続さぬやつい
まつきみひとな心への心さきたなくてもおもし
なし

おもしあられぞ神仏もなさきまありてもそくごくそれ
やらまる心人かうぞうをおくするありいかにも我
心もち身をちをあらきめよくしく神仏のち
からとかくらくいのちきなくとすれば
そのおもしありて神仏のおもやりまするに
いのちでもおぞらなしきさいてそれぞ行も
のありて天下と一国と一家（け）もなるまじことなり
ちいさき身もこさくいふまきあるこきまへ
いおぬしれなもちまてきるのはましてゆくなり

おまへハこそのよしあしハ天たうよりさづかり給
よしこゝろハ天道よりはなれぬものにしきと安天
のこゝろハたりがたくたりやすし心を
くるれいきわうへ気をうるはしくたれとも
それぐはそぶらそれてはこゝろもあり程
まもそくぬかし万人それぐはそのつを
天たうよりうけてたへし世へだん乃
こゝろざし一とふをあかめすはまし此こ
あろざしをかくれざし

気をはいろく気をくみたる天たうそいへること
ひろくしてきハまりなし されども心ことの所
なり人もまことのちをしり、ひとたびは天たうと
おなし人の相やうことすることを千も万もあ
れども心よりいづくぬけなし、こゝろをしれ
まことにたうとなるなればこそまことみちをいらんと
いふは格物致知と云ふことをあかしてこゝろを
修ことはすなはちそのまことと天たうのまこと
一ひとつをはなれつ 我一念おこるせんと

おりふしとこゝそれ称んはつゐてよくよくしあん
しくこれはよくよりおこるだうりより
おこなひとてもよくよりおこらば
すこしだうりにはつれくへうつけくるすぐ
それだうもんにかなはずしれとしるものなり
そのしるせしこれはすなはちしくさはん
いましめちゐむまれつきあひゆへなり
そのはかあしきこともみれくすこれをな
ちゑあるゆへなりこれをかんちといふなり

格の字はいたるともきたるともよむなり此
こゝのよきとかりてこゝろへよくよきゆへなるこゝの
んをよくまもれ格の字をうけたりいふるとへ物はい
たるなり物の字はことよむなりことはいふるとも
物あれどことあり物とはたゞほつかくいふなりこ
ゝはその物はつねくことあるなりちくえくは物あ
つま父母あれば孝行のことあり物につのまくた
まあるところへんをとやるをいふるといふなり此
いたるところは我はあるところなりかれはある

だうりはみなされはあらしくみゆるとも格とく
いふよりおと移こゝろはあらぐしてみえ　れぞぜんおく
あるくなりあくをさりてぜんをなほとりとす
ぼことれさ御とよむしうゝなりされどもつゞくま
ころはいはいらしがまし遠てあれえぞのみぜんは
つきかざさゆるはつるのくみぜくつしぬすへのき
たらぬささはよりじんするやなりのやうなるらし
すれぞあくをさりぜんをなすはやまし　おくとき
もとぬればあくぜんなりき此時は物格と格字をよむ

ことたゞしきハ我ちれいるなるなり至ハ到格なり
志ぜんとく我かいとよりかまそなへてあるちゑれん
とかふをのなりおんちれ此志ずくを内ことくいなり
念をまことふ卞すの心もこれをいふなり志かれどん
お世乃内にとらんためれくるまハ格おなりそ
のくみんへまむまれつきたるちよりいぜるをの
やうくのごとく一務んおもふひくまくるすれば
内ことくあ見て物たゞしき見内物つかさどれど
心たゞしさ見る物もたゞしきなりられど

みなみなさまかとい婦なりたゞしきんかうふかきこゝろは
めでたくとうちとるあしまでもみれたゞしき
なりみなおさまれば天下のこと大小みな御き後
になりそれをおさめ天下をたてまするみちも
みれこれをのべさせ給ふものなりそれつらのことたし
たゞめでたくいろくのたがれでたてよきあつめさる
もこれをあれをのこしてるすゞし　なり

藤園平左衛門開板

110X
236
1